

会派視察・研修報告書

会派名 オールたじみ

代表者名 石田浩司

1 日にち	令和6年7月3日(水)
2 視察先 研修名、主催者及び会場	東川町
3 参加者	石田浩司、奥村孝宏、成田康弘、黒川昭治
4 調査・研修の内容	人口増に向けた取組みについて
5 主な内容	<ul style="list-style-type: none">・ 導入の経緯及び実施状況について・ 予算と執行状況について・ 町のPRや発信で工夫した点・ 移住者の元の居住地、職業、移住の理由及び目的等の傾向・ 成功に至るまでの失敗やその克服について・ 移住者が着実に増え続けている理由とその仕組みについて・ 町議会としての関りについて・ 今後の課題と展望について
6 所感、提言事項、 課題等	<p>【議員氏名】石田浩司</p> <p>北海道のほぼ真ん中に位置し、旭川市から車で30分の距離にある大雪山を中心とした自然豊かな町において、近年人口の増加が見られます。視察を受け入れていただきました菊地町長および能登議長が出席され説明の内容に基づき、町の人口増加施策について詳述します。</p> <p>町では、様々な施策を実施しており、その中でも特に注目すべきは子育て支援策と移住の取り組みです。</p> <p>1 子育て支援策</p> <p>(1) 木工の椅子のプレゼント</p> <p>家具木工の町として、出産記念に木工の椅子をプレゼントする取り組みがあります。これは新しい命の誕生を祝うとともに、町の伝統工芸を後世に伝える役割を果たしています。</p>

6 所感、提言事項、
課題等

(2) 小学校卒業時の木製椅子のプレゼント

小学校卒業時には、卒業生に学校で使った木製の椅子をプレゼントすることで、思い出を大切にしています。

(3) 学校環境の整備

小学校は平屋建てで、広大なグラウンドが整備されており、子供たちがのびのびと過ごせる環境が整っています。

2 移住政策

(1) 中間管理住宅制度

町が空き家を整備し、希望者に賃貸する中間管理住宅制度を導入しています。具体的には、町が空き家所有者から10年間の賃貸契約で借受し、町がリフォームを行います。その後、移住検討者には2年間、月額1万円で貸し付けを行い、10年後には所有者に住宅を返す仕組みです。

(2) 国費を活用した制度

この制度は国費を活用しており、貸す側と借りる側双方にメリットがあるように設計されています。

これらの施策から、町の人口増加に向けた真剣な取り組みが感じられます。特に、子育て環境の整備と移住者の受け入れに力を入れているこの町は、今後ますます注目されることでしょう。

【議員氏名】 奥村孝宏

全国的に人口減少が進む中、30年にわたって緩やかに人口が増加している東川町の人口増に向けた取り組みについて視察した。

1 まちづくり

自然と文化と人が出会う“写真映りのよい”まちづくりを進め、写真そのもの以外に景観も意識したまちづくりが行われている。

2 関係人口

まちの特産物である“米”や“木工品”などを返礼品としたふるさと納税事業に力を入れている。

また、ふるさと納税者や町を訪れた多くの方々を「関係人口」や「株主」として、町との関りを持つことで後の移住者につなげている。

3 子育て・教育

まちづくりの柱に“子育て”、“教育”を掲げ、手厚い対応がされている。

6 所感、提言事項、
課題等

具体的には、生まれた子どもに、椅子を贈る「君の椅子」プロジェクトは、町の特産品である木工を使って、椅子に“名前”や“生年月日”を刻印しプレゼントするものです。

さらに、町立東川小学校は、広大な敷地に270mの廊下がある平屋建て校舎、天然芝の野球場、人工芝サッカーなど子育て世代は、たまらず移住を考えてしまいそうな素晴らしい小学校でした。

4 空き家対策

東川町が10年契約で、空き家所有者から空き家を借り、町が空き家所有者に対し、月1万円を支払う。町は空き家をリノベーションし、賃貸物件として移住者等に貸し出し、10年後に所有者に返却するシステムは画期的でした。

5 移住定住

社会増の内訳は、3割が隣接の旭川市、3割が北海道内、3割が首都圏、1割がそれ以外。

旭川市は通勤圏内ですが、道内及び首都圏へはアンテナショップ、移住相談ツアーなどの企画を通し、町への移住者を得ることで、社会増につなげ、結果的に人口は30年増え続けています。

本市においても、子育て・教育に力を入れるとともに、空き家対策を並行して行うことで、人口減少に歯止めをかけたいと考えます。

【議員氏名】成田康弘

北海道のほぼ中央、旭川市の南に位置する、人口約8,600人のまちである東川町は、30年にわたって、人口が約2割増加している、大変魅力ある町です。

担当職員の他、菊地町長、能登議長、飯塚副議長、議会事務局長が終始同席し、分かりやすい説明と質問などへの丁寧な答弁をしていただきました。

出生数と死亡数による「自然増減」は、常に減であるのに、転入と転出による「社会増減」が上回り、人口が緩やかに増え続けています。そこには、数々の理由がありました。

◇ 写真文化首都「写真の町」

「自然」「人」「文化」を大切にし、『「写真映りの良い」町・人・物づくり』の創造をめざす。

◇ 基幹産業の誇りと自信 北海道屈指の『米』どころ

大雪山旭岳のミネラル豊富な地下水でコメ作り。最高ランク「特A」を2011年以来、連続獲得。

6 所感、提言事項、
課題等

◇ 公設民営酒蔵

「水」＋「米」→「日本酒」 2019年全国でも珍しい「公設民営型酒蔵」が誕生

◇ 木工家具「家具・クラフトの町」

東川メイドの「旭川家具」は、日本五大家具産地の一つとして海外でも有名

◇ 若い世帯の転入により、この10年間、高齢化率が横ばい→高齢者福祉サービスの充実

◇ 外国人登録者数が500人を超え、人口の6%を占める→日本語学校の設立

◇ 母子健康手帳交付数は、30年間横ばい→子育て支援サービスの充実

◇ 移住よりも、定住を中心に考える→美しい町を町民で作り、写真映りの良い景観・環境に配慮

◇ 移住体験を年に3～4回行い、暮らしのイメージを醸成。町民との交流会なども開催

◇ 空き家の整備（リフォーム）をし、移住希望者に貸し出し、10年後には所有者に返納する。

◇ ふるさと納税は8億超と大幅増→納税者を「株主」とし、返礼品以外に限定企画・2泊宿泊提供

町長が、「先手を打つ！空き家にしない」と、力強く述べられたことが印象に残っています。実際に、空き家は少ないし、古い建物は、メイン通りには、皆無です。

新まちづくりとして、町長の目玉の交通対策は、「郊外の集落から中心地へのルート（約5～6キロ）、中心地の周回ルートを整備する」と聞き、本市の交通対策の参考にできればよいと感じました。

【議員氏名】 黒川昭治

東川町は、過疎化が進む中で、なぜか30年間で約2割も人口が増えている。

（傾向）

- ・ 自然動態では減少が進む中、社会動態で転入がそれを上回っている。
- ・ 出生数以上の小学校入学者数があることから、子育て世代の移住者が多いことがわかる。

人口8,600人と、人口は、当市の1/12ではあるが、2割の増加

は大きいと考える。

自然が多く、人口密度は極めて低い。その豊かな自然環境に恵まれて、更にそれを活かした施策が功を奏した。なお、移住者の前居住地は、全体の約3割が旭川市、3割が北海道内、残りがその他とのこと。

大雪山国立公園の区域内に位置し、地下水を利用した生活が行われているため、すべての町民が無料で地下水を利用できることも、観光客や移住者に魅力的な場所となっている。

東川町は木工業が盛んで、全国的にも名高い「旭川家具」の一部がここで生産されている。

風景や水、空港からの距離など、豊かな自然や地理的な環境が移住者を引き寄せている要因となっているようだ

子育て環境も充実しており、幼保一元化施設「ももんがの家」や東川小学校の整備が行われている。東川小学校の全長270mの平屋校舎、当市の陸上競技場レベルの整備された校庭は、目をみはる。

自然と調和したまちづくりを重視し、写真文化を活性化させるなど、東川町は自立政策を進めてきた。「写真の町」を宣言し、映りの良い「町・人・物」を作っている。

死亡や転出による空き家にも対策を打っており、リノベーション費用を補助し、体験宿泊・体験移住などで魅力をアピールしている。

このような取り組みが、東川町の人口増加に寄与している。人口減少が進む中で、小規模な町が自立を選択し、魅力的な環境を提供することで、移住者や若い世代を引き寄せている。

この小規模な町で、ふるさと納税は13億円と驚くべき数字である。主たる返礼品は米。そのブランド米のPRなど、「金」を投じて更なる魅力を創成・発信し、大きくリターンさせている。

まったく環境が違う当市では真似ができないが、この成功事例は、本市も含め地方創生の参考になるのではないかと考える。

7 写真等

※視察の場合は必須、研修の場合は任意



視察会場の案内板



東川町役場前にて



菊地東川町長あいさつ



石田会派代表あいさつ

※ 視察先、研修先ごとに1枚作成すること。

※ 「6 所感、提言事項、課題等」は、参加者全員分を記載すること。